8/6(土)、まいどの倫研です。暑中お見舞い申し上げます。毎日忙がしいお仕事されていることと存じます。「今週の倫理」は、日々のお仕事の源は家庭にあり
今、じっくり考えてみましょう。
幸せ塾 アホ鳥

今週の倫理

8月のテーマ ｜ 家庭愛和

2022. 8. 6～8. 12

1293号

八日度一句「夏盛り、雪国に咲いて ヨシイクゾー」どうぞ～

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載いたします。

愛和の家庭が出発点

丸山竹秋

T氏は、書類を広げたまま、呆然としている。ペンを手にしてはいるが、視線は紙と机の上を落ち着きなく動いているだけで、暗い感じである。

「課長がお呼びです」

ハッと気がついたように、あわてて立ちあがり、そのデスクの前にたった。

「きのうの仕事に、こんなミスがあるんだがね……」

とズバリとやられてしまった。註文の写しを部下の者が他のところへ回していた。それを係長として気がつかなかったのだ。

似たようなことが過去にあって、T氏は課長になかなかなれないのである。それどころか、このごろは左遷の声さえ、ささやかれはじめているのだった。

もっと仕事にとりくまねば……。他の者に負けないよう成績をあげなければ……。T氏は、いつもそう考えるのだが、どうしても打ち込んで働けないのである。

最初の妻とは離婚した。後妻とも、もうひとつしっくり合わなかった。今はパートタイムの勤めに出ているが、休みの日にも、しばしば家を空けて出歩いているらしい。

こうした家庭の問題に、彼は悩まされているのだ。たえず、わが子のこと、妻のことが眼前に浮かんだり消えたりする。それは暗く悲しく彼の心を痛めるのであった。仕事に打ち込めないのも当然である。

家庭とは、いわば、人生の旅路におけるハキモノである。靴とか草履などのようなもので、ハキモノが悪ければ歩けない。歩けない人生ほどつまらないものはなかろう。

と同時に家庭は聖堂であるべきである。なぜか。家庭はこの聖なるべき自分自身が、そこに生命のやすらぎを得、そこから世の中に役立つべき仕事に出ていくところからであるからである。

どうしたら家庭をよくすることができるか。それは第一に、さきに述べた聖堂の自覚をもつことだ。そして第二に、家庭こそまず教育のはじまるところであり、また実るところであると認識することである。

そのためにはどうするか。

夫は妻のすべてを受け入れて包容し、常に方針を明確にして前進していくことである。妻は夫のすべてを明るく受けて、その心によりそい、ぴったりとついて動くことである。親はまずわが親のよき子となって後、わが子の心を受け入れつつ指導するように接する。子のほうは親の心を知ろうとつとめ、親の希望をまず立てて後、わが思いを活かさんとするのである。

T氏は、悩みの末に、夫としてとにもかくにもこうした実践にいそしむことを決意した。見かねたある先輩の導きのままに、彼は妻を憎み、子を責めることをやめようとつとめたのである。

（『あなたは生命の元を見つけたか』より）

え・城谷俊也